

## 宮本百合子 自己形成への軌跡

- デビュー作『貧しき人々の群』が書かれるまで -

正本 君子

日本大学大学院総合社会情報研究科

### A Study of Yuriko Miyamoto

- A way to the formation of her self as a woman writer -

MASAMOTO Kimiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This thesis is a study on the formation of Yuriko Miyamoto's self as a woman writer. She was the prominent among women writers born in the Meiji period. Judging from her early writings which date back to her childhood and school days, we can say that Yuriko Miyamoto already had a slight sense of humanitarianism. Her efforts as a writer were from the beginning directed to describing her living world. She was brought up in a favorable environment and enjoyed reading many books, so that she was able to publish *Poor Peasants* when she was at the age of seventeen. On this novel her activity as a writer was based in all her life. This paper especially focuses on the process of the formation of her self before the publication of the novel.

#### はじめに

宮本百合子（旧姓中條 本名ユリ 1899-1951 M32）<sup>1</sup>は20世紀前半、激動の時代を生き、波乱に満ちた人生を送り、果敢な執筆活動の最中、終戦後僅か5年余りで忽然と世を去った。作品の多くは自伝的私小説や評論だが、その中で『伸子』は女性の自立を主題とした代表作となった。百合子は現実の難問に対し冷静に立ち向い、自己に忠実に妥協しない前向きな生き方を選んだ。生涯を通じ社会に対する批判的な態度と、高い理想を目指す闊達な生き方は、どのようにして育まれたものか。百合子の作品を読む上では、生い立ちから十代の頃までを見ておくべきかと思う。ここでは1916年（T5）17歳でデビュー作『貧しき人々の群』が書かれる頃までの文学志向を中心にまとめて見た。その生活環境や、特に百合子に影響を与えたと思われる人々との出会いの中に、百合子の自己形成の確立への軌跡が見えると思う。

#### 1 百合子の二人の祖父

父方の祖父中條政恒（百合子1歳2カ月の時没）は米沢藩出身で1872年（M5）福島県の典事（課長職）となり福島に移住し、同県安積郡桑野村の原野の開墾に着手した。水耕田に必要な水は猪苗代湖からの疏水を掘削すべきだと政府に建言した。財政の乏しい明治政府への助成金嘆願、地元出資者の募集、難工事、未経験の入植者の生活に至るまで率先して計画、貫通のため半生を捧げた人である。

この地が政恒の名付けた開成山である。「安積開拓の父」と呼ばれたこの祖父は、百合子の『貧しき人々の群』に出てくる開拓者である。そこに暮らす移住者の惨状は作中にリアルに表現されている。

政恒は健康を害し官吏を退いたのち東京に住み、私塾を開き、長男（百合子の父）精一郎（1868—1936）や父の弟省吾をはじめ後藤新平や伊藤忠太らを育てた。

晩年、開成山の人たちに人望が厚かったため請われてその地に移り、小高い丘の上に居を構え読書や詩を作って暮した。百合子が書いた「明治のランプ」<sup>2</sup>には、祖父の書齋は「興味ある探検場所であった」

ようだ。当時まだ珍しかったランプやこうもり傘を持ち帰り、村人を驚かせたことも記されている。

祖父亡き後は、地味な暮らしをした祖母運（おうんと呼ばれた）が土地を守り、訪ねてくる百合子を秘蔵子として溺愛した。百合子の成長にとってかけがえのない存在であった。

母方の祖父西村茂樹（百合子3歳の時没）は、佐倉藩に生れ儒学や英蘭学を学び、福沢諭吉や西周らと「明六社」（1873年）を興した啓蒙思想家である。

西村は「基本は人民一身の品位を高くすることに在りて、推して社会全体の上に及ぼすものなり」（明治8年4月）<sup>3</sup>と道徳論を述べている。

小田切秀雄の説明によると、これら「明六社」の思想家達は「啓蒙ノ眼ヲ覚マス」事を社会に広め「封建的迷蒙を啓（ひら）き文明の道を明らかにしようとした」と述べ、西洋に学びつつ近代的な発展のため多くの発言をし、明治政府の打ち出した近代化と同時に、民からの啓蒙であったと記している。<sup>4</sup>

西村は1875年（M8）から天皇、皇后の進講を約10年間務め、宮中顧問官や華族女学校の校長、貴族院議員も歴任した文学博士である。「繻珍のズボン」<sup>5</sup>には、何かの儀式の時、礼服のズボンが無く祖母の「繻珍の丸帯をほどいてズボンにして」間に合わせた事が書かれている。「祖父の書齋」には「紫檀の本棚が詰まっていて、艶よく光っていた」のを遠くから見るだけだった。百合子がこの祖父の偉業を知ったのは、のちに明治史の中で祖父の名を目にし、その思想を理解してからであった。

この祖父と祖母千賀子の次女が百合子の母葎江（1876—1934）である。（自筆年譜・『宮本百合子全集』別冊1981年12月 新日本出版社）

この二人の祖父については大森寿恵子が編集している『宮本百合子——文学とその生涯』（写真集）、<sup>6</sup>やその著『若き日の宮本百合子』<sup>7</sup>に詳しく記されている。百合子は明治の変革期に貴重な功績を残した二人の歴史上の人物の子孫であった。

## 2 父母

父中條精一郎は、東京帝国大学工科大学建築学科

を卒業し、百合子誕生の頃は、文部省の建築技師であった。文部省建築課札幌出張所長となり、現在の北海道大学の前身である札幌農学校の校舎の設計監督や同校土木工学科の建築学講師の嘱託を務め、幼い百合子も札幌で暮した。

北海道での任務を終えた父は、一家で東京の本郷区駒込千駄木林町2-1（現文京区千駄木5-20-14）に移り住んだのは、1902年（M35）の春、百合子が三歳の頃であった。翌年父は旧藩主上杉憲章に随行してイギリスに赴き、ケンブリッジ大学で3年半建築を学んだ。百合子が8歳の時、父が帰国した当時は日本の欧化も進み建築界もビルの建設に移行した。

翌年文部省を退任し、1908年（M41）東京丸の内民間の建築事務所を曾禰達蔵と共に設立した。『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』<sup>8</sup>には、父の活躍が記載されている。当時の設計料は、反物一反という位の時代であり、建築業における社会的地位の確立のため建築士法制定や、国民美術協会（1913年3月設立）の会頭を15年も務め貢献した事が記されている。<sup>9</sup>

父が英国で身に付けたのは建築学ばかりでなく、英国紳士としての実生活で身につけた日常生活も、百合子に多くの海外情報を身近なものとして接する機会を与えることになった。それが後年、百合子の遊学にも繋がる。

「父は明治初年の寛闊な空気のなかに青春時代をすごして死ぬまで一種の自由主義者であった。」<sup>10</sup>と父を評している。百合子にとって父はまさに「絶え間なく太陽のあると云う暖かさを心に覚える。」（日記1923年5月15日）存在と記している。百合子は成人したのち思想上の弾圧を受け、次々と苦難の道を歩む事になるが、百合子の研究家である小林栄三が書いた「不屈の知性」<sup>11</sup>で生涯を貫いた。常に向上心に燃え向日的であった要因はまさに父親譲りのものであったと言える。晩年に「私の明るさは父の遺産なのよ」と知人に語っていることも父からの影響の強さを示しているものだろう。父については自伝的作品のほかに「わが父」、「父の手紙」、「父の手帳」に書かれており、特に、父の綿密で几帳面な記録に百合子が敬服している。

母は、華族女学校を首席で卒業し、皇后から、『言海』を賜ったという才媛である。若い頃の母が遠く離れたイギリスの父に、夜ランプの元で手紙を書き送り、父から届いた絵葉書や手紙を大切に綴じていた。その姿に学んで百合子も片仮名で「トヲサマアタクシガ——」と父を慕う手紙を出している。百合子が成人したのち、多くの書簡を書き、湯浅芳子に宛てた『百合子の手紙』<sup>12</sup>(118通)や宮本顕治に宛てた『十二年の手紙』<sup>13</sup>(994通)などの原点は、既に小学低学年の頃に芽生えていたようである。

母は百合子に期待をかけ深い愛情を注いだ。母が受けた教育は、旧道徳であったため口論も絶えず軋轢もあった。「母はめずらしく強烈な性格の女性であり、人間としての規模も小さくなかった。母の属した社会の規範がそれを押しつけて萎えさせたり、歪めたりさえしなかったら、鍛錬を経て花開くべき才能を持っていたと思う」と没後、「母」<sup>14</sup>に書いている。

文学的素養のある母は祖父の雑誌に原稿を送ったり、晩年には自分史とも言えるべき過去の出来事やヨーロッパの旅行記を『葎の影』<sup>15</sup>に残している。百合子は頑固な母の「一番正当な根気づよい発展者であろうと希っている」と理解を示している。

百合子の天性とも言える文学的才能と知性に加え努力家で「情熱的な気質」(「母」)はまさに母から受け継いだものであろう。百合子の自伝的作品、『伸子』<sup>16</sup>『道標』<sup>17</sup>『二つの庭』<sup>18</sup>などに、母は近代の典型的で個性的な女性として描かれ、厚みを添えている。

本多秋五は「あえて割り切っていえば、百合子の真骨頂は<一本の矢>であることにあったと思う」<sup>19</sup>と評している。これも母譲りであろう。

### 3 幼少の頃

百合子は1899年(M32)2月13日、東京市小石川原町13番地(現文京区千石1丁目)に生れた。(戸籍では2月11日届出)。まだ生後8ヶ月の頃両親に連れられ東京から、札幌に移り住み、3歳までを過した。<sup>20</sup> その頃のエピソードは、弟國男が母から聞いた思い出話として、幼いながら活発な行動

派であった事がかかれており「発育早く智恵熱をよく出し、——北海道の雪中を、ひきつけて、人事不正の姉を抱いた母親が、裸足で、遠くの医者に駆けつけた事も、あったと伝えられる」と書かれている。(「幼時の姉」<sup>21</sup>)

『伸子』に描かれている北海道そのままの雄大な景色、「たっぷりな日光」、「たっぷりな空気」、「たっぷりな牛乳」が幼い百合子を、健康で活発な純真な少女に育てたようだ。先に挙げた写真集に出ている3歳頃の写真は、目元や口元に意志の固さがにじみ出ている。百合子は都会で暮しながら、少女の頃から自然豊かな郡山の開成山へ引かれていくのもこのあたりから来ているのだろう。

東京での暮らしは、百合子の作品「田端の汽車そのほか」(1947年7月)<sup>22</sup>に描かれている。当時の漱石の作品に出ている団子坂や田端の畦道など周辺の事が記され、百合子の作品の「動坂の家」はこの家で、敷地も400坪余りあったという。百合子は苦難に出会う度、この実家に戻って住んだ。

晩年までに都内を16回転居したようだが、作家活動の拠点はやはりこの地であった。東京という文化の中心で世の変遷を見つめ、自分自身の賢固な地歩を確実に築いていった。まさに白樺の人たちと同じ東京人であったといえる。

父が留学中の留守宅では、邸内で野菜などを作っており、ジャガイモばかりが食膳に出たという。百合子は年の近いお手伝いさん(女中)が、母から叱られると「稚い正義感が芽生えてそういうとき段々女中の弁護者となっていった」(「私の青春時代」<sup>23</sup>)という。弱者に対する百合子の同情があったようだ。

百合子は幼い頃から、利発な子で御用聞きにも要領よく断ったので、中條家には背丈の伸びない「化物娘」がいるなどと噂された。と渡辺カナ(女中)が書いている。<sup>24</sup> 長女として母を助け、主婦の役割までも果たし、幼い弟妹の面倒をよく見た。母は夜中に赤ん坊が泣いても女中が起きないといって百合子に添い寝の役目までさせたという。

百合子の「雨と子供」<sup>25</sup>には、大きな木々のある広い庭を好んで眺めていたことが書かれている。ある雨の日、空地に青紫蘇の芽生えを植えたものが、大雨で流されそうになる。必死で小石を拾ってきて

困んでも追いつかない。自分はピシヨヌレになって守ったがとうとう流されてしまった。幼い百合子の行動力に加えて必死の努力は、こんなエピソードにも表れている。のちに農民の苦労を実際に見て、『貧しき人々の群』を書くことになる。

#### 4 叔父中條省吾との出会い

父の留守中、百合子が6歳の頃、父の弟省吾が帰国し同居することになる。この叔父は「烈しい一途な天性」(「本棚」)で帝国大学法学部を卒業する年に周りの人を振り切ってアメリカへ行き宣教師となる。この叔父が百合子に影響を与えたと思われる人物である。叔父は「ホーリネスの信者で、支那やアメリカを旅行して」帰国したという。<sup>26</sup> 百合子はこの叔父によくなつき、時には友達の悪口を言いつねられたりし、幼いながらも倫理観を植えつけられ、尊い訓育を受けたようだ。

百合子の親族で唯一の厳しい宗教家であったこの叔父とは一年ほどしか一緒に暮していないが、百合子には深い印象が残っている。百合子は学校の勉強よりも、この叔父が話してくれる多くの聖書物語に興味を持っている。一例を挙げると次のように回想されていた。「アダム・イブの話。ノアの箱舟。クリストの子供の時の話。Babelの塔」などの話がそれで、時には「教会の説教台に立って、幾百かの聴衆を前にして居ると同様に」百合子に聞かせた。百合子はその物語や、それにならって自分で作った話を幼い弟妹に聞かせてやった。その頃から、創作意欲に満ちていた事がわかる。おそらく得意満面で即興的に話をつくり聞かせていたと察しられる。

半年くらい経って叔父は中耳炎に罹り治療の為、通院するが病状は悪化し入院する。百合子は動けなくなった叔父を毎日のように見舞う。叔父は百合子が落して泥んこになったリングにさえ何度も礼を言ってお祈りを始める。ついに治療も空しく亡くなってしまった。

幼い純真な百合子はこの薄幸の叔父に対し、「彼の味方は世界中に自分がたった一人いるばかり」と同情している。上記の事は叔父が亡くなってから十年後、百合子が17歳の時「追憶」<sup>27</sup>に書かれて

いる。「——私と、宗教的に訓練されたどちらかと云えば重苦しい厳粛な愛情を注いで居た彼との間に行き交うて居た気持ちは、極く単純ではあったにしろ他の何人の手出しも許されない純なものであった事を思い出す」と記している。この事は百合子の精神的な自己形成の重要な要素になっていると思う。

「追憶」には、叔父が英文で書いた著書、『神の大なる日』は、薄暗い叔父の部屋に荒縄で縛られたまま積まれてあったという。宗教の研究のため大志を抱いて渡米したが、志半ばにして病に侵されてしまった。運命とはいえ、あたかも百合子のために帰国し、僅か一年余りの短期間に、自分の命を賭したクリスチャンの教義を百合子に伝道した。

百合子の作品には聖書の言葉が織り込まれている。『貧しき人々の群』の「序にかえて」の「師よ、師よ——」も武者小路実篤の『小さき泉』<sup>28</sup>からの引用で、弟子の言葉と思われる。『地は饒なり』<sup>29</sup>の最後には「主よ、汝の愛するもの病めり」とある。

百合子が19歳の時、アメリカ遊学の折、イラニアン語の苦学生と出会い、心引かれていくのもこの叔父との出会いがあったからだろうか。

#### 5 小学、女学生の百合子

父の帰国は百合子が8歳の頃であった。小学生の頃には、『三郎爺』<sup>30</sup>に出てくる雇い人の一郎爺やが袴姿で門のところで待っていたという。それは、百合子が道草しないよう監視するためであったらしい。しかし、百合子はうまく爺をまいてしまうこともあったという。低学年の頃は、母親から習字を、女流ピアニスト久野久子<sup>31</sup>にピアノを習った。また西洋の美術は父がロンドンで見つけた図録で楽しみ、美術館や観劇にも連れていかれた。このように情操教育にも心配りのある家庭であった。両親の知的で自由主義の豊かな愛情に溢れた家庭環境で、百合子は天真爛漫な少女時代を送る事ができた。父の事業も上昇期であり、百合子は物心両面に中流上層部の恩恵を受けた。

百合子は本郷の駒本尋常小学校から、弟國男が入学した名門校である誠之尋常小学校(東大にも近く優秀な生徒が集まっていたらしい)へ転校し、成績

も良く、お茶の水高等女学校へ入った四人のうちの一人であった。

百合子の下には弟國男の他に、英男、妹寿江がいるが、他の三弟妹は幼い頃に亡くなっている。「十九の時、十五であった弟が亡くなった。それより前に十六のとき、五つであった妹がなくなっている。——もう一人赤ん坊が——」（「青春」<sup>32</sup>）亡くなっている。実際の兄弟を合わせると九人であった。

1914年9月11日、妹華が、亡くなり、翌月の10月に「悲しめる心」<sup>33</sup>を書いている。そこには百合子が臨終に立ち会った時の悲しみを「無意識にしたたり落ちる涙にあたりはかすんで耳は早鐘の様になり、四辺が真暗になるような気がし」と記している。

この時、百合子は家族の悲嘆にくれる情景を見て、自分自身の恵まれた境遇と肉親に対する至純な愛情を強く感じている。この悲劇に直面して「私の体はよし消滅しても私の思想ばかりは不朽に生をうけ得る様に日々務めて、尊い不朽の生を得る事の出来るだけの思想を築こうとして居るのである」と表現は誇張されているが15歳の百合子は、もはやこのような死生観を身に付け、固い決意を抱いている。

百合子は悲嘆のどん底からいさぎよく立ち上がり、強い意志で自己形成の確立に向かう前進がみられる。

## 6 開成山と百合子

百合子が生涯、人生の曲折の折々に訪ねては心を癒され、新たな出発への鋭気を養う事ができた開成山はどんな所であったか。開成山へは百合子が5歳ぐらいの時から出かけていた。「裸足で、どこの百姓家の土間へも、鶏にくっついて入って行くような暮しかたをした」（「行方不明の処女作」）<sup>34</sup>と記されている。学校も夏休みになると「海老茶の袴をはいて、その頃は一つの駅で五分も十分も停まる三等列車にのって、窓枠でハンカチに包んだ氷をかいてはしゃぶりながら」訪ねていった。<sup>35</sup> 百合子の『貧しき人々の群』<sup>36</sup>をはじめ、数篇の短編は、この開成山が舞台となっている。開成山の地元に住む百合子研究者である塩田郁夫は、「百合子の文学には開成山の開拓という進取の気性で前進した姿が強く反映して

いる」（「百合子と開成山」<sup>37</sup>）と記している。

百合子の作品には、美しい自然の情景が織り込まれ、心が和む場面が多いのも、この開成山の豊かな自然環境が背景となっている。開拓初期の村人の暮らしは悲惨な状況にもかかわらず、貧しいながらも活気のある暮らしに百合子はあたたかいまなざしを注いでいる。特にわんぱく盛りの子どもの描写には寛大な愛情が込められている。

百合子が見た村人の暮らしぶりは、「心に刻み付ける何かをもって印象に迫ってくるのであった。」と描かれ、夏の嵐で杏の緑葉が「煽られて翻ったとき、私の体を貫いて走った戦慄は何であったろう。」とし、急に驟雨が全身に流れた時「官能と精神とが交錯して」「表現の欲望」（「青春」<sup>38</sup>）となったと記す。その「表現の欲望」こそ百合子の文学であった。これを書いたのは1940年3月百合子が41歳の頃であった。村道に深く刻まれた車の轍が印象に残り後年もう一度書きたいと語っている。

## 7 女学生の悩み

感受性の鋭い百合子は早くも小学高学年から女学生のはじめ頃「空想や、漠然とした哀歎、憤懣などは、皆彼女の内へ内へとめりこんで」いって精神的な悩みを抱くようになったという。<sup>39</sup>

百合子は、誠之小学校に送った回顧文に「自分はよく、ませ過ぎた憂慮の快さに浸ったものだ。〔1921年12月〕（「思い出すかずかず」<sup>40</sup>）と記している。

自伝的作品『地は饒なり』にも、転換期の精神の起伏について、悩める少女の心情を次のように綴っている。彼女が些細な事物を「道徳的標準」に照らし合わせているうち、想像していた大人の世界の理想は打ち砕かれ、恐ろしい厭わしい事物に満ちた「うき世」が現れてきた。矛盾と混乱に巻き込まれ、友達や尊敬していた人にも失望するようになり、「物足りなさや寂寞」とを感じずにはおれなくなった。そして「唯一人悩める者」となっていく。

しかし、「弾力に満ちた発育力」は「尊い感情の根元を大切に保存」していた。百合子の自己形成の通過点となる悩める時代は、自分の勉学への希望に満ちた発展へつながっていった。

その転機となったのが1911年(M44)12歳のとき、東京女子高等師範学校付属高等女学校(お茶の水高女)の入学であった。精神的に落ち着き健康をとりもどした百合子は、「頭脳がいいスポンジのように」難しい本も読もうとすれば、ある程度理解できるようになっていく。「ただ読むばかり」、「自分の能力の続くかぎり、手に触れるほどの書籍の中から、ほんとうの偉い人の姿を見出そうとしたのである」と記す。

しかし、お茶の水高女での悩みは、「女の学校」<sup>41</sup>に自伝的に書いている。1913年、百合子は女学校3年の頃には、中條家の自由な家庭とは違った、官立の女学校の教師から言うに言えない圧迫を感じていた。

それは祖父(西村茂樹)の名前を挙げ、行動や服装、髪型に注意されたり、質問しても満足いく解答が得られないという不満もあった。百合子の豊富な読書体験による知識や思考力は益々レベルが上がり、学校では専門的知識の修得には乏しく、標準の中流若婦人となるための教育には満たされないものを感じたのは無理もない。「私の青春時代」<sup>42</sup>に次のように記している。「女学校の三年ごろを思い出すと、——不良少女というものになってゆくモメントが一つ二つではすまないほどどっさりあった。学校の空気と学課が自分をしっかりと掴えない。苦しく無意味に思える」と悩んでいる。

多感な百合子の心情は、ともすれば訳もなく沈んでいった。4年生ごろには「授業を早退けしたりし、上野の図書館へ行った。佐竹ヶ原の草の中へ転がっていたりした。昔の婆やが酒屋の裏にスタレを下げ賃仕事して居る。そこで、一日いた事もある。」<sup>43</sup>と記している。

佐藤静夫は『百合子と同時代の文学』<sup>44</sup>の中でこの頃の日記から「まず強い印象を受けるのは、彼女の自己形成への意欲の強さである」と述べ「他の一方でこの時期の百合子はその資質としての伶俐でしかも感受性の豊かさにより、それゆえに自然の微妙な美や人間感情への敏感な反応にこころ動かされることも多く、そこに自己形成への確たる手がかりも掴みがたい面があったともいえる」と記している。

のちに百合子は「人生の最も基礎となる五年を、

夢とほか過せなかったのか、という疑問が起こって来る。」〔1922年3月〕(「入学試験前後」<sup>45</sup>)と記しているが、百合子の鬱屈した精神的悩みは、再び旺盛な勉学の意欲により快復し、図書館と自分で買う本によって満たされることとなる。百合子の自己形成にとって欠くことのできない読書は、この時期一段と熱意を持ってきた。それは次の決意で分る。

私の少女期の危機は、それをよすがにして、辛うじてまともにすごされたのであった。四年生になって、本当に文学がすきときまってから、あぶなっかしさはよっぽど減った。自分の熱中し、うちこむ目標がきまったから。(「私の青春時代」<sup>46</sup>)

自分の「うちこむ目標」が決まったことは、百合子にとって画期的な出来事であった。女学校の上级生になった時、『貧しき人々の群』の「序にかえて」に出てくる「C先生」として描かれる千葉安良と出会う。この女教師は、「西洋歴史からやがて教育と心理学とを受け持たれた。この先生こそ、私にとって忘れられない先生である。」と書かれるほど敬愛した先生である。

新しい思想を持つ千葉安良は百合子の成長に強い影響を与えたようである。図書館の利用法や読書について百合子にアドヴァイスをし、百合子は日比谷や上野の図書館へも行くようになる。小柄な百合子が図書室のカウンターへ申込書を提出すると、係りの人は最初怪訝な様子であったという。「私のかおだって眼が二つほかついていませんよ。」(日記1913年7月23日)<sup>47</sup>これは高度で難解な図書を申し込んだ折の光景かと思われる。この日の夜、百合子はつくづく「時」と言う事を考える。「私は七十まで生きるとしても五十五年ほかない、その間、二五六までミッチリ勉強してもほんとに働くのは一寸ほかないんだ」と記している。(日記1913年7月23日)<sup>48</sup>

暑い日にも、百合子は古い机をあちこちに移動しながら、読書に余念がない。「百合子さんの本虫さん」と言ったのは開成山の一年上の「トシチャン」らしい。一日でも本が読めなかった日は「一番辛い事」(日記1913年7月26日)と思っている。



女学校五年生の終わり頃、卒業を控え、女子大の入学試験も迫っているが、習作「お久美さんと其の周囲」<sup>49</sup>を書き上げ、一月末から新たに「貧しき人々の群」を書き始める奮闘振りであった。百合子の卒業試験「人生観を問う」の答えは下記の通り書かれている。

私が死んだ後残るものは只私の思想の現れである事業ばかりである。私の努力の結晶ばかりであるのを思えば刻々と努力の尊さを感じずに居られようか。私のこれから先は一刻もゆるさない努力で一貫すべきなのである。——私は最後の息を引きとるその瞬間まで努力で終わらなければならない。——私は、完成された少なくとも完全に近い自我の美しい寛大な胸に多くの人類の喜びを湧かせたいのである。私の努力で貫かすべき一生は、実に足元の堅固なものであるべきことを希望してやまないのである。<sup>50</sup>

これを読んで感激した千葉安良は百合子を励まし、誠意に満ちた感想を次のように書いてくれた。

これ丈の反響を生じ得る素質を備った方に私がこの学科をお話する事の出来た機会に私は心から感謝しました。

——真剣な態度で、貴方の歩んで行かれる人生を何時までも理解して行ける様に、私自身も発達させたいものである。(日記 1916年3月17日)<sup>51</sup>

上記の百合子の答案については、先の「悲しめる心」より更に成長している。ここには、力強い若さが溢れ、「足元の堅固なもの」を自覚し、これからの人生に真摯に向き合う姿勢と決意が現れている。

百合子の自己形成の軌跡が明確に現れた時期である。17歳の百合子は、読書と創作により思考力を増し、人間的な向上心を培っていった。

## 8 読書と習作

百合子の自筆年譜によると読書は、まだ字の読めない幼い頃より、『文芸倶楽部』、『新小説』、『女鑑』、『女学雑誌』など書棚からひっぱり出して絵を見ていた。母が文学好きであったため「大本箱に茶色表紙の国民文庫が何冊も」並んでいたようである。

百合子は小学五年生のころ「自分の好きなのは音楽なのであろうと思っていた」という。ところが字が読めるようになってからは「文学はもっと身近いもの」になったともいう。これをみると百合子の文学の目ざめは、早くも小学高学年頃から始まったと思われる。

1911年、女学校に入学してからは、『文章世界』、『女子文壇』などの懸賞文も読んだり、古典では『竹取物語』、『平家物語』、『方丈記』、『雨月物語』また近松や西鶴の作品も耽読したり写して表紙を付けたりした事が記されている。

日記(1913年7月24日)によれば14歳の頃読んだものに、ロビンフッド物語、花月雙紙、Beggar、イノックアーデンなどが記されている。また、聖書、ギリシャ神話、『小説史稿』、『上等記事論説文例』、『約百記』、『道話一則』、『歴史攻究法』、『世界文学史』もある。『古今集』から好きな歌を選んで書き写してもいる。『新古文林』に出ている宣長の「尾花が本」、楽翁の「関の秋風」も写している。(7月29日)

日記には、時々読書感想が書かれているが、ここではタイトルだけを挙げ、大体の読書傾向を辿ってみる。1914年1月、百合子15歳に近い女学校3年生の終わり頃には、『獵人日記』、『リヤ王』、『埋もれた青春』、『伯爵令嬢』、『青い鳥』、『誘惑』、『サニアン』。2月には『獄中記』、4月には『日本外史』、『新書太閤記』などが記されている。

8月30日に買い求めた本は、『子が見たる父トルストイ』、『思い出』、『懺悔』、『ホームー物語』。

ワイルド、ダヌンチオ、ポーの短編集、『理想』、『ロシアの作家、メーテルリンクの『知恵と運命』、『ロマンローラン、クープリンの『生活の河』、『決闘』、『ニーチェ。他日、買って読んだのは、古典、武者小路実篤、夏目漱石全部、森鷗外、トルストイ全作品、ツルゲーネフ、チャーホフ、リップスの『倫理学の根本問題』、『ヴントの心理学からロムローゾ、フロイトに至るまで』など広汎な読書がなされている。(『宮本百

合子選集』第12巻 1969.8)

平林たい子は『宮本百合子』<sup>52</sup>に、この読書歴について「中でもトルストイ人道主義の影響が強く『貧しき人々の群』などには現われており——のちにこの人道主義は、社会主義に変わるのだが、その思考形式といったものは、ついに、社会主義の時代にもその殻を残している」と記している。

読書はこの他にもモーパッサン、シェイクスピア、チェホフ、ゴーリキイ、小川未明、尾崎紅葉、樋口一葉、野上弥生子に及んでいる。

さらに女学校卒業の頃には、文学作品のほかに『宇宙の謎』、『戦争とパリ』、『人類の過去・現在・未来』、『宗教心理学』、『一八史略』、『人及芸術家としてのトルストイ並にドストイェフスキー』、『近代思想一六講』、『ニイチエの哲学』、『西洋哲学史』などを讀んだ。また、ルッソー、エミール、ショペンハウエルの名も日記の読書欄に記されている。

この頃の読書について佐藤静夫は『宮本百合子と同時代の文学』<sup>53</sup>の中で「自然科学や社会科学、哲学書があげられている。百合子の文学的成長を求めての推移は、こうした読書のうえにもうかがうことができる」と記している。

1916年3月、百合子が17歳の時『貧しき人々の群』を脱稿してから国木田独歩の『運命』、『空知川の岸边』、『爛』を讀み、買った本には『後に来るものに』、『ドストイェフスキーの『叔父の夢』、『貧民心理の研究』、『ニイチエの研究』、『我ら何をなすべきか』、『社会力』、『泥濘』、『トルストイの『結婚の幸福』、『処女地』、『その前夜』、『アラディン and パロミダス』、『ペリアス、メリサンダ』、『メーテルリンクの『Three Plays』、『悪霊』、『ドリアン・グレー』、『De.Profund』、『ワイルドの『獄中記』、『獵人日記』、『アラディンとパロミダス』、『更に買った本に『犯罪の研究』、『セバストポール』、『ロマンローランの『トルストイ』、『クープリンの『決闘』、『沙翁傑作集』、『コサク』、『アンナ・カレリナ』、『生物学と哲学ノ境』、『ペリアストメリサンダ』、『アラジアンとパロミダス』、『ペラミー』、『Little Women . 55』、『Longfellow の詩、クープリンの『生活の河』などが記されている。

以上がデビュー作執筆前後までのものを日記か

ら拾ったものであるが、この年の7月頃の読書範囲は自然科学や宗教、心理学、哲学書へと拡大されている。

百合子の両親の理解と財力にもよるが、学業を続けながらこれほど読書に熱意を持ったことは特筆すべき事であろう。

百合子は常に自己反省し、前進のため努力を重ねていった。しかも、なお「土台読まないのや知らないのだからであると思います。文学史的に古典をよむということは私の場合大変おくれて必要から学んだので、さかのぼるのはいつも手間どります」(1941年8月「読み落としした古典作品」という謙虚さである。

百合子は読書だけでなく、創作にも熱心であった。百合子は小学生低学年の頃、ロンドンの父に送った片仮名の手紙には成績は、全部「甲」であったと書いている。特に作文が得意であったようだ。

1912年、百合子がまだ女学校2年生の頃、「西鶴の永代蔵の何かを口語体に書き直し」たり、与謝野晶子の『新訳源氏物語』をまねた「錦木」という小説を習作として書いたりしたことが自筆年譜に記されている。女学校3年の日記(1913年7月22日)には、せっかく書いた「鴨」の原稿は小さい妹に破られてしまい、その後書き直されるが、この環境を見ると書くために百合子が誰にも邪魔されない開成山へ出向いた気持ちが頷ける。

「魔女」(「気に食わずあとで焼いてしまった」と注記されている) また「火取虫」、『花月雙紙』の序文なども書いている。

さらにこの年(1913年、14歳)、多くの習作を書いている。「つぼみ」、『芽生』、260枚をこえる「千世子」、『ひな勇はん』、『お女郎蜘蛛』、『葦笛』(戯曲)など。このほか、海岸を散歩する男女の事を書いたもの(百合子はすごい恋愛小説だったと述べている)は母に取り上げられ、所在が判らなくなっている。他にも「グレゴリー三世」や西洋史で習った「カノッサの屈辱」を史劇「胚胎」に纏めたり、祖父の祭事で開成山へ行ったときの事を「旅へ出て」に書いている。「栄蔵の死」(仮題、120枚)「追憶」<sup>54</sup>、「二十三番地」<sup>55</sup>(43枚)、また「平家物語」(言文一致)



として、葵の前、小督、小宰相の身投げ、内裏女房、横笛、義王などの六話も口語訳されている。「夜」(短詩)は、「私のものとしてはかなり重く出来て居ると信じる」と記す。「小鳥の如き我は」(散文詩)は、モハメットの心を一寸はうけて居るだけ共「夜」に似た心持で書いたものだと言っている。(日記1914年1月7日)<sup>56</sup> これらを見ると読書は習作に反映し早熟な百合子は、恋愛小説を習作としていくつか書いている。

百合子は熱心に耽読し自己の作品に表現したいと言う意欲に満ちていたのであろう。「海の夫人」と「熊」の舞台を観劇して批評を書く。また『太古美術の瞥見』を訳す。「お久美さんと其周囲」、「鈍色の夢」、「小さい子供」、「農村」など多くの習作も書かれている。百合子は懸賞募集などには応募せず、ただひたすら書き続けるほど創作に興味を抱いたようだ。その間、文壇との接触もなく僅かに開成山出身で東大<sup>57</sup>に在学中の久米正雄とその友人、芥川龍之介らの来訪を受け文学を語り合うくらいであった。

## 9 デビュー作「貧しき人々の群」前後

百合子が女学校卒業の頃、読書傾向の変化につれ、習作も先の王朝ものや恋愛ものなどとは変化し、現実に対する視野を広げていく。

この時期は、創作への決意と自己形成への大きな飛躍を遂げた頃である。「貧しき人々の群」に取りかかり、他の習作「お久美さんとその周囲」も書く。

読書においてもニーチェの哲学や思想的なものを読み、女学校の卒業まじかの1916年1月1日の日記に次のように書いている。「——自分は何か自分の考えを得なければならぬと思うことが苦しい位明らかに思われてくる。——思索を以って始められた此の一年は私にとって意味深い事である。」<sup>58</sup>

さらに1月2日には、「私はすべてを学理的に理解して確かな踏み台に立って世の中を見るべきである。」1月6日には、「私は確かに自分を大切に育てて居るだろうかと言う事は疑問になってくる、——毎日どれだけ私の実質を作っていくかと思うと情けなくなる」と述べて常に自己牽制している。

1月9日に『人及び芸術家としてのトルストイ並

にドストエフスキー』<sup>59</sup>を読んでいる。百合子の『貧しき人々の群』は久米正雄がトルストイを読む事を勧めたから書く事ができたのだという。岩淵宏子はトルストイの『地主の朝』、『我等何をなすべきか』を挙げ百合子の作品への影響を指摘している。<sup>60</sup>

「貧しき人々の群」を書き始めたが考えがまとまらない。「貧者に対してもって居た気持ちの偽である事、偽りの多い生活をして居る事はずかしく思う」(日記1916年1月23日)<sup>61</sup>と反省し、この気持ちを作品にも織り込んでいる。

1916年1月の感想として「私の改革期の来た事を切実に感じた月である。私は思想的に種々の変化をした。私の愛人は真である。」と断言し、自分自身の恋愛にも決着を付ける。習作「大いなるもの」<sup>62</sup>には「真」について次のように書かれている。

世の中のあらゆるものに「真」のないものは決して長生きする事は出来ない。——

道徳も、芸術も宗教も、その源は此の「真」と云う一字のみである。——

個人主義は、即ち自己完成主義であらねばならぬ。

自己完成は、真と一致したものであらねばならぬ。

こう決意した百合子は次のように記す。「永遠不変の真の中に、絶えずえんえんと焰を吐く太陽に向かって私は、斯く叫ぶのである。真の幹に咲く、個人主義の花ほど偉大なるはない。実る自己完成の果実は、千万人の喉をうるおわす宙を蓄えている、と。」(「大いなるもの」)百合子はここで個人主義について考えるようになる。夏目漱石が「私の個人主義」を説いたのは、1914年11月25日の講演の時であった。

女学生の百合子にとってはまだ思考錯誤の段階で、作品に披瀝するようになるのは『伸子』執筆の頃になる。白樺派の人たちの風潮にも動きが見られた。

17歳の百合子は自己研鑽の努力を積み、思考力の向上と共に見事に自信を取り戻した。「貧しき人々の群」を書き始めてから前年書いた「農村」<sup>63</sup>の原稿が一時紛失して、探しても見つからなかった時は、

「貧しき人々の群」の進み方も思うように行かなかったとされるが、原稿が見つかったので、構想もはっきりしてきた。その間、トルストイも読んでいます。

「貧しき人々の群」は「農村」が書き直されて出来たものと、作者自身も記していたが、日記（1916年3月1日）<sup>64</sup>には二つの作品を出してみても「まるで比較にならない。彼那（あんな）ものをとくとして書いて居たのかと思うと情けなくなる」と自己反省している。これほど創作の上でも、短期間に飛躍的な進展を遂げた事が確認される。多くの人がこの時期の長足の進歩を指摘している。

先に挙げた堅固な決意のもとに、弟英雄の病気もあり百合子が最も多忙な時期でありながら、多くの読書、数編の習作の執筆などに打ち込み、知的な活力の漲っている時期である。同時に自己形成への大きな進展は、デビュー作によって明らかになった。

1916年3月18日（日記）ついに「貧しき人々の群」を脱稿した。「私は最後の節を泣きながら書いた。如何に深い喜びと悲しみが私の心を領した事であろう。厚く重なった結果を見ながら一月の努力の結果を深く感謝したのである」と完成の喜びを示している。作者自身は『貧しき人々の群』は、「私の貧者に対して持って居た感じははたして真実な一点の虚栄もなかったものであったろうか。この心が私に『貧しき人々の群』を書かせるのである。」（日記1916年〔1月の感想〕<sup>65</sup>）と自己反省している。

この作品の「序にかえて」に「師よ、師よ 何度倒れるまで 起き上がらねばなりませんか？ 七度までですか？」——「否！ 七を七十乗した程倒れてもなお汝は起き上がらねばならぬ」とあり「私は私の道を、ただ一生懸命に、命の限り進んで——地響きを立てて倒れ得る者になり——どんなに傷ついても、また何か掴んで起き上がり——」先生と一緒に大空を仰ぐことを記している。まさに百合子の人生訓とも見受けられ、その後の実人生に披瀝している。

作品の主人公私（百合子）は、開成山の開拓農民の窮乏を見て、初めは「穢い」「臭い」「何かの巢」としか目に映らない。しかし、そこに生きる飢えた子ども達にののしられ、自分は地主の「お孫さん」

であり、彼等の親達の収穫を持ち去り、贅沢に膨れ上がっていることを恥かしく思う。

私共と彼等とは、生きるために作られた人間であるということに何の差がある？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基（もと）となつて、彼らは貧しく醜く生きているのを思えばどうして侮ることが出来よう！——高ぶつた瞥見を報い得よう！私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかったのである。（『貧しき人々の群』三）

この貧しさを救うため自分は何かしなければならぬが、私は「一銭の金も一粒の米も持っていない」。祖母と下女とで食べ物や衣類を分け与えるが、追いつかない。街の貴婦人達の施しも飲酒に消え失敗に終わる。女学生の百合子は作品を書き進めながら、自己反省したが、そこに横たわる社会機構はまだ理解出来ていなかった。しかし、未知の世界への好奇心と疑問を抱く事は、百合子の成長につながり精神的な自己形成の重要な要素になっていく。

病弱な正直者の「新さん」も、酒に溺れた「善馬鹿」も共に人生の希望を失い、不幸のどん底で非業の死を遂げる。漱石の「掉させば」の言葉も出てくるが若い百合子には「一緒に濁水を浴び、——手も足も出なくなって終わってしまうのは、——あまり惨めである」。志賀直哉が言った「芥子粒」は、百合子は「私は、お前方の前には、芥子粒ほどもない人間だったのだ」と反省している。

最後に、「まだ女学生の自分には解決の手段も分らず、「この手はからっぽ」であるが、「どうぞ憎まないでくれ。私はきっと今に何か捕らえる。——お互いに喜ぶことの出来るものを見つける。どうぞそれまで待っておくれ。達者で働いておくれ！ 私の悲しい親友よ！」と約束している。

ここにこそ、この作品のテーマがある。有島武郎は別にして白樺派の人たちが言う人道主義とは目線の位置が異なっていたようである。本多秋五は「白樺派が切り棄てたひろい現実探求の努力」があると記している。<sup>66</sup>

この社会の底辺に注目する事が百合子の将来の文学活動の出発点であり「土台」<sup>67</sup>となった。思想上でもこの基盤を揺るがす事なく着実に進展していったのである。その努力と叡智は社会主義思想となって生涯を貫徹した。

## おわりに

百合子の小説、日記、書簡、感想、小品及び先行の参考文献をひもときデビュー作『貧しき人々の群』の頃までを辿ってみた。生い立ちから見ても、中條、西村両家の祖父は特に開拓者と啓蒙思想家であり、時代に先駆け後進のために貢献した歴史上の人物であった。その気質は父の業績にも受け継がれ、百合子にも尊い遺訓を与えていると思われる。

感受性の鋭い利発な百合子は、膨大な読書を糧とし、常に自己研鑽を重ねながら、ついにデビュー作が脱稿されるに至った。その間、精神的な苦悩もあったが、明朗で健康な百合子は、向上心を抱き努力を怠ることなく前進を続けた。それはすべて自己形成の確立のためのものであった。

天性とも言うべき文学の才能はごく幼い頃から萌芽を見せており、知性豊かな環境と愛情に包まれた幸運な出発であった。デビュー作は人道主義を主軸とし社会の底辺に目を向けた作品となった。

このデビュー作が父の知人、坪内逍遙の推挙を得て『中央公論』(1916年9月号)に発表され、百合子の文学者への第一歩となる。マスコミは天才少女の出現と報道したが、辛辣な批判も百合子は冷静に受け止め、読書や執筆は続けられた。中でも被搾取者である小作人の悲惨な実情を書いた『禰宜様宮田』や滅び行くアイヌ人の悲劇を描いた『風に乗って来るコロボックル』など注目に値する作品が書かれた。

その後の苦難に満ちた百合子の生涯は、弾圧による投獄、執筆禁止、戦災など想像に絶するものであったが「不屈の精神」で自分自身の信念を全うする生き方であった。常に停滞することなく、挫折をバネとし、より高く羽ばたこうとする生き方はイデオロギーを越えて共感を呼ぶ。

多喜二・百合子研究会がこのほど新版『宮本百合子全集』<sup>68</sup>の完結を記念して公開講座を開いた。そ

こで伊豆利彦は「『貧しき人々の群』はそのおさなさにも拘らず、その新鮮さにおいて、発展する思想の根源にある人間的生命を表現において、百合子不屈の生涯と、その豊かな文学的成長の根源にあるものを鮮明に示して」<sup>69</sup>いると評している。

注 宮本百合子の作品の引用は『宮本百合子全集』新日本出版社(1980.2 - 1981.2)全25巻、別巻2、補巻2、補遺に拠った。

<sup>1</sup> 百合子は1932年2月宮本顕治と結婚し移籍した。

<sup>2</sup> 『全集』第十七巻 p.520

<sup>3</sup> 日本弘道会編『西村茂樹全集』□思文閣1976年 p.13

<sup>4</sup> 小田切秀雄〔現代文学士3〕「啓蒙思想と文学」日本文学全集月報3集英社1971年12月

<sup>5</sup> 『全集』第十七巻 p.584

<sup>6</sup> 大森寿恵子編『宮本百合子——文学とその生涯』(写真集)新日本出版1976.1

<sup>7</sup> 大森寿恵子著『若き日の宮本百合子』——早春の旅立ち 増補版 新日本出版社1993.10 p.6 (「早春の旅立ち」1977.1)

<sup>8</sup> 黒崎幹男他編『曾彌達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』佐藤文庫720/SO 北大図書館蔵 p.151

<sup>9</sup> 大森寿恵子編 写真集『宮本百合子——文学とその生涯』新日本出版社1976.1 p.40

<sup>10</sup> 「私の青春時代」『全集』第十七巻 p.713

<sup>11</sup> 小林栄三「宮本百合子—真の人間の自覚を血肉化して、国民の目線で科学的把握」、小林栄三著『不屈の知性——宮本百合子・市川正一・野呂栄太郎・河上肇の生涯』新日本出版社2001.6 p.82

<sup>12</sup> 湯浅芳子編『百合子の手紙』筑摩書房1978.3

<sup>13</sup> 「獄中への手紙」は『全集』第十九巻—第二十二巻・『十二年の手紙』筑摩書房(その1)1950.6、(その2)1951.4、(その3)1952.10

<sup>14</sup> 「母」『全集』第十七巻 p.400

<sup>15</sup> 追悼録として没後出版されたが非売品(国会図書館蔵)

<sup>16</sup> 『伸子』『全集』第三巻 p.5

<sup>17</sup> 『道標』『全集』第一部 第七巻 p.5 第二部 第七巻 p.343 第三部 第八巻 p.5

<sup>18</sup> 『二つの庭』『全集』第六巻 p.241

<sup>19</sup> 本多秋五「一本の矢」『宮本百合子研究』作家研究叢書 新潮社1957.4 p.10

- 20 札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫  
63 札幌文学散歩』札幌市、札幌市教育委員会  
1992.12 p. 99
- 21 中條国男「幼時の姉」『宮本百合子』追想録編纂  
会編 岩崎書店 1951.5
- 22 「田端の汽車そのほか」『全集』第十七巻 p.714
- 23 「私の青春時代」『全集』第十七巻 p.712
- 24 渡辺カナ「中條家の『化け娘』」『追想録』・中村  
智子著『宮本百合子』筑摩書房 1973.6p.5
- 25 「雨と子供」『全集』第十七巻 p.292
- 26 「祖父の書齋」『全集』第十七巻 p.541
- 27 『全集』補巻二 p.324
- 28 武者小路実篤の詩文集『小さき泉』天弦堂書房  
1916.7 p. 42
- 29 『地は饒なり』『全集』第一巻 p.295
- 30 「三郎爺」『全集』第一巻 p.339
- 31 『道標』に出てくる川辺みさ子で、ウイーン留  
学中に自殺した
- 32 「青春」『全集』第十七巻 p. 581
- 33 「悲しめる心」『全集』補巻二 p.7
- 34 「行方不明の処女作」『全集』第十七巻 p. 419
- 35 「処女作より前の処女作」『全集』第十七巻 p.377
- 36 『全集』第一巻 p.5
- 37 塩田郁夫「百合子と開成山」岩淵宏子・北田幸  
恵・沼沢和子 編『宮本百合子の時空』翰林書  
房 2001.6 p. 12
- 38 「青春」『全集』第十七巻 p. 581
- 39 「地は饒なり」『全集』第一巻 p.304
- 40 「思い出すかずかず」『全集』第十七巻 p. 72
- 41 「女の学校」『全集』第十七巻 p.695
- 42 「私の青春時代」全集第十七巻 p.713
- 43 『現代日本文学全集』第 56 編年譜 改造社版
- 44 佐藤静夫「貧しき人々の群」とその前後、佐藤  
静夫著『宮本百合子と同時代文学』本の泉社  
2001.5 p. 101
- 45 「入学試験前後」『全集』第十七巻 p.92
- 46 「私の青春時代」『全集』第十七巻 p.713
- 47 日記『全集』第二十三巻 p.14
- 48 同書 p.14)
- 49 「お久美さんと其の周囲」(習作)補巻二 p. 199
- 50 中村智子著『宮本百合子』筑摩書房 1973 年 6  
月 p.14
- 51 日記『全集』第二十三巻 p.117
- 52 平林たい子「宮本百合子」、平林たい子著『宮本  
百合子』文藝春秋 1972.6 p.163
- 53 佐藤静夫「『貧しき人々の群』とその前後」、佐  
藤静夫著『宮本百合子と同時代文学』本の泉社  
2001.5 p. 121
- 54 「追憶」は習作『全集』補巻二 p. 324
- 55 「二十三番地」は習作(『全集補巻二 p. 103)  
で、隣家に住む家族を十六歳の百合子が見聞し  
た事が書かれている。
- 56 日記『全集』第二十三巻 p.37
- 57 久米正雄の東大の保証人は父誠一郎がしている。
- 58 同書 p.81
- 59 ロシアの作家・評論家ドミトリー・セルゲーヴィ  
チ・メレジコフスキーの「トルストイとドスト  
イェフスキー」(1902 年)  
1914 年森田草平・安倍能成訳がある。
- 60 岩淵宏子著『宮本百合子——家族・政治・そして  
フェミニズム』翰林書房 1996.10 p. 20
- 61 日記『全集』第二十三巻 p. 93
- 62 「大いなるもの」全集補巻二 p.426
- 63 「農村」習作『全集』(補巻二 p. 127)
- 64 日記『全集』第二十三巻 p. 111
- 65 [一月の感想]『全集』第二十三巻 p.98
- 66 本多秋五「人道主義作家見習」本多秋五編『宮  
本百合子研究』新潮社 1957. 4 p.20
- 67 『田村俊子・野上弥生子・中條百合子集』の序詞  
に処女作に対し「土台よ。しっかり重みに答え  
る。」と書く。(1931.3)
- 68 『宮本百合子全集』全 33 巻は 2001 から出版。
- 69 伊豆利彦「人間らしく生きる——『貧しき人々  
の群』の出發」・『いまに生きる宮本百合子』伊  
豆利彦、澤田章子、岩淵剛、羽田澄子、須沢知  
花、辻井喬著 多喜二・百合子研究会編 新日  
本出版社 2004.9

( Received: January 10, 2006 )

( Issued in internet Edition: January 31, 2006 )